

昆虫が運んだ病原体でマツが枯死する「松くい虫」被害について、県産業技術センター林業研究所（平内町）が、危険度を示すハザードマップを8年ぶりに改訂した。10年間の気温データを基に分析した結果、危険度が「非常に高い」とされるエリアは、津軽平野の広い範囲のほか、日本海沿岸や青森平野などに広がっていることが分かった。同研究所は「被害対策は、従来の基本的な方法を徹底して行うことが重要」とし、あらためて警戒を呼び掛けている。

松くい虫被害をもたらす病原体は「マツノサイセンチュウ」と呼ばれる線虫。これを媒介するのが昆虫のマツノマダラカミキリで、被害防止に当たってはカミキリの生息域の拡大を防ぐことが重要となる。

改訂版のハザードマップ作成に当たっては、農業・食品

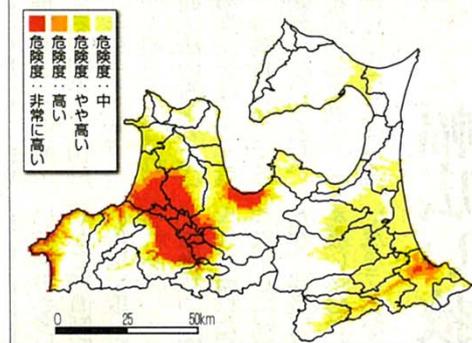
# 松くい虫「要警戒」広範に

5/18 東奥

## 林業研 ハザードマップ改訂

県産業技術センター林業研究所が作成した松くい虫被害のハザードマップ(改訂後) ※一部文言を省略

マツノマダラカミキリが侵入した場合の危険度(定着または被害発生)



産業技術総合研究機構（農研機構）のメッシュ農業気象データを利用した。マツノマダラカミキリがその地に定着することが可能と考えられる温度を基に危険度を検討。2010年からの10年で、目安の有効積算温度を超えた年が

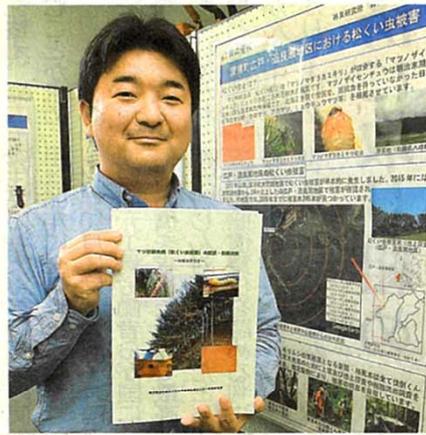
9年から10年あった場所を「非常に高い」、6～8年を「高い」、3～5年を「やや高い」、1～2年を「中」と分類した。

このうち「非常に高い」となったのは、津軽平野の広範なエリアのほか、深浦町の日

本海沿岸、青森平野、馬淵川沿いなど。海岸防災林としても、重要な屏風山地域についても、鯉ヶ沢町北部からつがる市南部にかけてが「高い」に区分されており、注意が必要となっている。

13年に作成した改訂前のハ

新たなハザードマップを載せている「対策の手引き」を手にする伊藤主任研究員



改訂版のマップを作成した林業研究所の伊藤昌明主任研究員(39)は、近年の温暖化の影響を指摘。その上で「枯れたマツの木や枝にカミキリが産卵する際にもマツノサイセンチュウが侵入することが、近年分かってきている。枯れ木や枯れ枝は徹底して片付け

ることが重要。カミキリが木

同研究所は新たなハザードマップを含む「マツ材線虫病の監視・防除対策」対策の手引き」の改訂版を今年3月に作成。関係機関に配布したほか、ホームページでも公開している。

(藤本耕一郎)

松くい虫 マツの伝染病で病原は体長1ミリのマツノサイセンチュウという線虫。単独で移動できず、体長3ミリのマツノマダラカミキリを媒介者にして移動する。線虫の寄生したカミキリが健康なマツの枝を食べるとき、かみ痕から線虫が樹木の中に侵入して増殖し、木を枯らす。マツが枯れると、その枯れ木にカミキリが産卵。さなぎから成虫になったカミキリに線虫が寄生し別の健康なマツに移るといふサイクルで被害が広がる。本県では2010年に蓬田村で自生するマツの被害が初確認された。県によると、今シーズン(20年7月以降)は深浦町と南部町で計59本(21年1月20日時点)の被害が確認されている。

ザードマップと計算方法などが違つたため単純な比較はできないが、改訂後のマップで危険度が「非常に高い」となったエリアは、13年版の危険度「大」の約1.5倍となっている。

一方、被害木を早期発見するための監視や防除帯設置など現在行われている対応については、「このまま継続してもらうことが一番良い」としている。

6月中旬なので、5月末までに駆除する必要がある」と語

令和3年5月18日 東奥日報 掲載

※この画像は当該ページに限って東奥日報社が利用を許諾したものです